

I 研究テーマ

特別な支援が必要な児童生徒が主体的に学び続けることができる状況づくり
～個別の指導計画の活用と見返しを通して～

II 研究テーマによせて

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学校の臨時休業や臨時的登校、家庭での外出自粛やマスクの着用など、今まで経験してきたことのない不規則な状況の中、先の見通しが持ちにくい不安な生活が続いてきた。

このような状況の中、特別な支援が必要な児童生徒の中には、生活リズムが崩れることで精神的に不安定な状態が続いたり、先の見通しの立たない不安からストレスを感じ、落ち着かない生活を過ごしたりしてきた児童生徒もいた。

特別支援教育委員会では、特別支援教育の専門性を生かし、このような状況の中であっても児童生徒一人ひとりをより深く見つめ、個のとらえを大切にしてきた。そして、児童生徒の困り感に寄り添いながら、児童生徒自身の「できるようにになりたい」という願いを支え、主体的な学びを促すことができるよう、教師が児童生徒のために何ができるのかということを考えてきた。その際、大事に考えてきたのが「個別の指導計画」である。

4月から始まった大きな変化の中、特別支援教育に携わる教師は児童生徒にどんな願いを持ち、どんな支援を行ってきたのか。また、家庭とはどのように連携してきたのか、また、これからどのような支援を行っていくのか。このコロナ禍の状況に関わらず、「個別の指導計画」をもとに、教師の支援が児童生徒の主体的な学びに結びつく状況づくりとなっているのかを考えていきたいと願い、本研究のテーマを設定した。

III 研究の内容

1 新型コロナウイルス対応の現状

3月からの臨時休業など、見通しの持ちにくい生活状況の中、生活面では生活リズムが崩れ、臨時的登校で登校渋りが起きた子、ゲーム依存が増した子、通常と違う生活に対応するのが難しく、落ち着かず、集中できなくなった子など、マイナス面の影響が出た子が多く見られた。

また、学習面でも、宿題を本人だけでこなしていくことが難しい子、新しい学習内容を理解するのが難しいため、復習が主になってしまう子、臨時的登校では普段より早い進度で授業が進むので、理解が追いつかなくなってしまう子、リモートの授業は原級のペースで行われるので、ついていくのが難しくなってしまった子など、多くの児童生徒たちが困難な状況に直面した

2 研究の方向

特別な支援が必要な児童生徒は個々の課題がそれぞれ異なる。そのため、特別支援教育の担任が児童生徒に何を願い、学びをどのように支え、主体性を伸ばしていくための状況づくりをどのように行ってきたのかもそれぞれ異なる。

今年度は、前例のないこのような状況の中で、特別支援教育の担任がそれぞれ何を考え、どのようなことを行ってきたかという実践を複数蓄積し、教師がお互いに学び合う場として考えていきたい。

具体的には、特別支援教育の委員全員が、自分の担任する児童生徒の中の一人を取り上げ、できる状況づくりの実践を積み重ね、実践事例としてまとめていく。

IV 研究で明らかになったこと

「個別の指導計画」に基づいた委員各校における実践事例

1 学習において、できる状況づくりを重ねることで自己肯定感を感じられるようになってきたC児の事例

小学校 知的障がい学級

1 児童の実態（「個別の指導計画」より）

- (1) 学年 性別 5年 男子
- (2) 日常生活の姿

C児は、興味があること、好きなことへの集中力はあるが、「わからない」「できなさそう」と思うと途端に集中力が途切れてしまう。また、「俺、頭悪いから」と言って考えようとする前に諦めてしまうところがあり、自己肯定感の低さを感じる。ただ、できた時やわかった時にはとても嬉しそうにする姿が見られる。

- (3) 「可能性の芽」「本人・保護者・教師の願い」から設定した教育課題

C児は、「できる」ことに喜びを感じられるので、「できる」授業の積み重ねで自信を持ち集中力も高まるのではないかと考えた。また、C児自信も「勉強がわかるようになりたい」と願っており、保護者も「自分の力を発揮して学習してほしい」という願いを持っていることから、C児には学習を起点に自己肯定感を高めたいと考え、「基礎的な学力と集中力をつける」ということを教育課題の一つとして設定した。

2 実践事例

- (1) 児童の姿

算数は苦手意識を持っているが、できる計算は意欲的に取り組む。鉛筆を正しく持つことが難しく、書くスピードも速いため字の形が整わない。また、視線が安定しないため、教科書を読んでいる場所がわからなくなったり、正しい漢字を書き写したりすることが苦手である。そのため、新出漢字がなかなか覚えられない。

- (2) 個別の指導計画を生かした支援（できる状況作り・手立て）と児童の学びや育ち

①個別の学習ノート作成

「書く」こと自体に抵抗感があり、学習への気持ちも萎えてしまうので、算数では教師が教科書の学習ページをコピーし、それを切り貼りして直接書き込みできるようなノートを用意した。その際、既習問題を解いてから本時の内容に入ったり、C児に合わせた練習問題を載せたりしたことで「わかった」「できた」の機会が増え、学習に対して意欲的に集中して取り組む姿が見られるようになった。

②音読用支援具の用意

視線が安定せず、教科書の音読に苦勞していたため、1行だけ読めるような支援具を用意した。それを用いて一人ですらすら音読できるようになり、宿題の音読も家の人に褒めてもらえる機会が増えた。

③漢字練習帳の工夫

常に正しい漢字が書けるように、漢字の練習帳の手本をすべて教師が鉛筆で書き、その横に教師の手本を見ながら書けるようにした。そうすることにより、字を間違えることもなく、ゆっくりきれいな字を書こうとする意識が高まり、褒められる機会も増えた。

3 考察

自己肯定感が低く、うつむき加減であまり元気のない様子だった C 児だが、笑顔も増え、今では元気に登校している。何かできないときがあると「俺って集中すればできるんだよな」とつぶやくなど、やればできる自分を感じられるようになってきた。C 児の生活を支える力となる「できる」を、これからも大切にしていきたい。

2 生活の流れや活動に見通しを持つことで原学級に参加できる姿が増えるようになった D 児の事例

小学校 自閉症・情緒障がい学級

1 児童の実態（「個別の指導計画」より）

(1) 学年 性別 5年 女子

(2) 日常の姿

- ・集団や慣れていない人の前では、話をしにくかったり、緊張したりする様子があるが、信頼している人や落ち着ける場所では、活発に話したり活動したりできる。
- ・初めてのことに不安な様子があるが、事前に内容や手順を確認しておくことで取り組めることが多い。

(3) 「可能性の芽」「本人・保護者・教師の願い」から設定した教育課題

- ① 学校生活に見通しを持ち、安心して登校できる機会を増やす。
- ② 友だちと関わりながら集団活動に参加することができる。

2 実践事例

(1) 児童の姿

母子共に離れがたく、欠席や遅刻早退が多い。母の送迎なしで登下校することができず、不規則な母の仕事にあわせて登下校の時間が決まるので、安定しにくい姿がある。登校時は不安そうな表情で母の袖をつかんで離さなかったり、母を介しての会話だったりするが、母と離れてしまえば、教師や支援級の友だちとよく話し、前向きに活動に参加できる。原学級での活動に不安感が強く、教師や支援員が常にそばについていないと活動が難しい。

(2) 個別の指導計画を生かした支援(できる状況作り・手立て)と児童の学びや育ち

- ・母の予定で登校するのではなく、一定の時間(8:00すぎ)に来て、4時間目終了時に帰るということを続けてみることを提案した。定着したところで昼食後、更に14時までとスモールステップで学校にいられる時間を延ばすことで、最終的には下校時刻まで過ごせることが増えてきた。
- ・初めての活動には不安感が強いいため、事前にどんな活動か必ず確認したり、場合によっては、友だちの様子を見てから取り組めるようにしたりすることで、参加できる活動が増え

た。また、取り組みにくい活動では、難易度を下げた目標も選択できるよう配慮した。

- ・原学級の座席や班のメンバー配置で、話しやすい友だちと一緒にになれるように配慮してもらうことで、ペア学習やグループ学習で発言する姿がみられたり、キャンプや運動会等の行事等も時間いっぱい参加できたりした。
- ・給食を担任と支援学級で食べていたが、コロナウイルス対策で、給食時に現学級で食べることになり、クラスの友だちのリクエスト曲を流すことをきっかけに、初めて教室で給食を食べることができ、そのまま習慣化することができた。

3 考察

登下校の時間を定めたり、学習活動の内容の事前の確認をしたりと、本人の見通しを大切にしてきたことで、前向きに学校に足を向けられる姿が増えてきた。また、クラスの友だちが、いつ彼女が入っても特別視することなく、当たり前のように接してくれることも影響が大きいと考えられる。母子分離の課題は大きく、保護者への対応には日々難しさを感じる。連絡を密にし、成長を共に喜ぶことで少しずつ進展がみられるようになった。

3 自己理解・他者理解の学習を通して登校できるようになった E 児の事例

小学校 知的障がい学級

1 児童の実態（「個別の指導計画」）より

(1) 学年 性別 1年 女子

(2) 日常生活の姿

- ・ASD（自閉症スペクトラム）診断。言語面では2歳程度の遅れが見られる。
- ・正義感が強く、「将来は警察官になって悪い人をやっつけたい」と口にしてしている。

(3) 「可能性の芽」「本人・保護者・教師の願い」から設定した教育課題

- ・身の回りの準備・片付けや持ち物管理、明日の予定の書き写しなど、日常生活で一人ですることができるを増やす。
- ・「教えてください」「〇〇はどうなりますか」等、要求や質問の言葉を覚えて職員に伝える。

2 実践事例

(1) 児童の姿

休校期間中のお預かりは支援学級で過ごす。「本当のクラスは〇組」「早く行きたい」と原学級への憧れを口にしていた。6月より授業が再開し、本人の希望で一日のほとんどを原学級で過ごす（担任、支援員の個別支援あり）。友達全員の名前も一番に覚え、積極的に参加していた。一方で他罰的な部分もあり、行動が遅れる児童に対して叱責する姿が目立つようになる。

6月中旬より、放課後デイより「対人関係でトラブルあり」と指摘され、本人も疲れ感を訴える。7月、「お腹が痛い」と学校を欠席、その後全く登校ができず。関係者で支援会議を重ねる中で、自分で目標を設定してできない場合にひどく落ち込んだり、友達に注意をして反感を買いトラブルになったりと、本人の疲れの原因と考えられることが何点か確認される。

- (2) 個別の指導計画を生かした支援（できる状況づくり・手立て）と児童の学びや育ち
- ・自分の状態について視覚的に理解することをねらいに、感情メーター（図1）を使用した。
 - ・SST学習で、肯定的な話し方を学習する。「うれしくなる言葉」をテーマにすると、思っていたことを次々に発表していた。
 - ・友達同士でトラブルになった際には、コミック会話を利用して状況を視覚的に振り返り、注意の際の適切な言葉遣いを担任と確認した。気持ちが落ち着かず暴言をぶつけてしまいそうな時には「先生に報告する（他者に仲裁に入ってもらおう）」ことをルールとした。
 - ・8月末より朝の7：30～8：00までの30分間のみ、ほぼ毎日支援学級に登校し、学習をした。学習を個別で行うことによって自信もつき「私、楽しくなってきた」と口にする。
 - ・9月より毎日朝登校でき、週一は4時間目まで授業を行う。スモールステップで「できる」達成感を積み重ねることを、支援者間で意識してきた。がんばり表も使用（図2）。

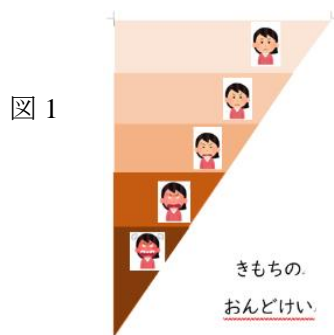


図2

9/24	9/25	9/28	9/29	
10/1	10/2	10/5	10/6	
10/8	10/9	10/12	10/13	

3 考察

園からの就学前の情報によると、人間関係も広がりつつあり、本人も小学校への期待感を持っていたとのこと。本人の理想と現実とのギャップ、また環境の大きな変化によって、心身ともに不安定な状態が生じていたと推察される。過剰適応への予防的対処について関係者間が共通理解を持ち、支援の方向を探ってきたことで、徐々に本人のペースに合った生活様式ができつつある。今後も無理なく、確実にできることを増やしていきたい。

4 興味があることや得意なことを取り入れた活動を用意することで、主体的・意欲的に活動に取り組む姿が見られるようになったF生の事例

中学校 知的障がい学級

1 生徒の実態（「個別の指導計画」より）

(1) 学年・性別 I年 男子

(2) 日常生活の姿

- ・友だちの返答が自分の思っているものでなかったり、自分が注意されたりすると「もういい」と物にあたってわーとなる。困っている気持ちを表せず、声がけに対して天の邪鬼的に反応してしまいどんどん困ってパニックになってしまう。そういうトラブルを心配して原学級や部活動へ行けない。

- ・初めて経験することやうまくいかないと感じたことに対しては不安感を持ち、その場所へ行けなかったり活動へ取り組めなかったりする。

<F生の興味関心・得意なこと>

- 友だちや先生方と関わるのが好き。 ○数字、特に「4」が好き。
- クラスの友だちの名簿番号と誕生日を表にしていける作業は、集中して取り組んでいる。
- 科学技術部に所属し、パソコンが使える。(ローマ字入力や文字の変換や装飾など)

(3) 「可能性の芽」 「本人・保護者の願い」 から設定した教育課題

- ・初めてのことや苦手なことにも「やらない」と言わず、前向きに取り組むことができる。

[心理的な安定(2・3)]

2 実践事例

F生の実態

場面設定や手立て

F生の育ち

<先生方の身長調べ>

- ① H先生は背の高い先生で、H先生の身長に興味を持ったので、先生方みんなの身長を調べようという活動を設定したことで自然に取り組めた。
- ② 身長を聞き取ったものを記録する表と、クリップボードを用意したことで、ボードを持って先生方に聞きに行きたいと積極的に先生方に身長を聞きにいっていた。その時に、先生方に質問する台詞を表の上を書いておいた。なかなか先生方にも敬語が使えないF生であるが、台詞通りに丁寧な言い方で質問できた。
- ③ パソコンのエクセルで、先生方の身長を表を入力し、そのデータを背の順にソートしてからグラフにして先生方に配った。

<しそ・梅ジュースの販売>

- ① コップを2種類(150cc用と200cc用)とジュースの種類があることで、先生方に注文をとるやりとりができた。
- ② ジュースの量を量れるメジャーを用意しておいたことで、自分でコップにジュースを注ぎ、先生に渡し、お金を受け取るやりとりを楽しむことができた。おつりの計算も自分で行った。
- ③ しそジュースの料理の手順表を用意したら、いつも行けない特別棟の調理室へ行って、お湯を捨てる場所以外、手順表を見ながら自分でしそジュースを作ることができた。
- ④ ジュースの原液を水で希釈するときに、計量カップに量るところを教師の指示でやっていたが、手順表を用意することで、ジュースが減ってくると自分で計量カップを使って、ジュースを作って販売の準備ができるようになった。
- ⑤ テストで職員室に入れなくて、販売に行けなかったことをきっかけに「販売記録表」「請求書」を作ったことで、先生方に注文を取ってジュースを届け、その時に請求書を一緒に持っていくという活動に意欲的に取り組めた。販売記録を表にしたので、番号をつけて先生方の名前を書き添えていくことがF生にはまったことや請求書にクラスのはんこを仰々しく押して本物の請求書っぽくしたことも、意欲に繋がった。

<他教科での取り組み>

- 暑かったり、体育館まで行くことに抵抗があったり、体を動かすことに興味を持てなかったりして授業に参加しにくいことがあるが、体育の担当職員に、F生が数字や表に興味があることを伝えたところ、体育の時間に縄跳びの回数の記録係やビブスの番号を並べる手伝いを用意して、体育の授業に参加できる工夫をしてくれている。

3 考察

- ◇例年やっている生活单元でも、その時の生徒の実態や興味関心に合わせた場面設定や手立てを用意する必要があり、その有用性を他教科にも伝え取り入れてもらうことが、教科担任制の中学では必要であると感じた。
- ◆先生方との関わる機会が増やせたが、話し方や距離感の課題はまだある。道徳や自立活動で、会話のルールや他人との距離、話すタイミングなど扱ってはいるが実際の場面とつながらない。
 - ◆自分の興味のある活動以外でも、取り組んだり集中が続いたりできるといいが、それがなかなかうまくいかない。教科や道徳などやってもらいたい学習にも取り組もうというふうになってもらえるような、手立てが必要である。

5 やる気を引き出し望ましい行動をほめることで気持ちの切り替えが上手になった A 生の事例

特別支援学校 中学部

1 生徒の実態（「個別の指導計画」より）

- (1) 学年 性別 I年 女子
- (2) 日常生活の姿
 - ・自分の思い通りにいかないときに言葉遣いが乱暴になることがあるが、励ましや称賛の言葉をかけられているときには穏やかな口調や態度が見られる。
 - ・普段は活動の動き出しに時間がかかったり、活動への長時間の集中が難しかったりするが、動機が高まりその気になるといつもより力を発揮できる。
- (3) 「可能性の芽」「本人・保護者・教師の願い」から設定した教育課題
 - ① 気持ちを切り替え、学習開始までに活動場所へ移動できる（心理的な安定）
 - ② 学習や活動を最後までやりきることができる（めあて・見通し・意欲）

2 実践事例

- (1) 生徒の姿

素直で頑張り屋でみんなのお手本として率先して活動する反面、学習を終わりにして次の準備をすることなど、切り替えて次の活動に向け動き始めることがとても苦手。次の活動を促す教師を無視して活動を続けたり、意に沿わないことがあると教室や廊下に座り込んだり、ときには暴言を言ってつばを吐き、教室を飛び出して放浪に出ることもあった。
- (2) 個別の指導計画を生かした支援（できる状況作り・手立て）と生徒の学びや育ち

A 生の行動問題を **ABC分析**し、その主な機能を「注目や関わりの獲得」と推定した（図1）

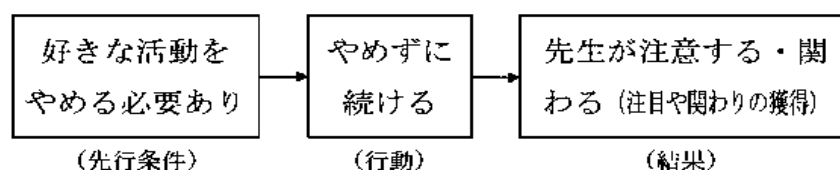


図1 A 生の行動問題のABC分析結果
（「好きな活動をやめずに続ける」の例）

そこで、1) **先行条件**に一工夫をしてやる気を引き出し、2-1) その結果、望ましい行動が起きればすぐに**強化**し、2-2) うまくいかずに不適切な行動が起きれば**強化しない**という方針で支援に当たった。

具体的な支援内容は、1-1) 望ましい行動をしている写真を撮影しておきそれを見ながら自分の頑張れた姿を語る活動の設定、1-2) 活動の切り替えのタイミングで競争心やいい子になりたい気持ちをくすぐる言葉がけ（以上、**先行条件**への工夫）、2) 望ましい行動後、大げさに分かりやすくほめる・関わる（**強化子**の提示）だった。

具体的な支援内容は、1-1) 望ましい行動をしている写真を撮影しておきそれを見ながら自分の頑張れた姿を語る活動の設定、1-2) 活動の切り替えのタイミングで競争心やいい子になりたい気持ちをくすぐる言葉がけ（以上、**先行条件**への工夫）、2) 望ましい行動後、大げさに分かりやすくほめる・関わる（**強化子**の提示）だった。

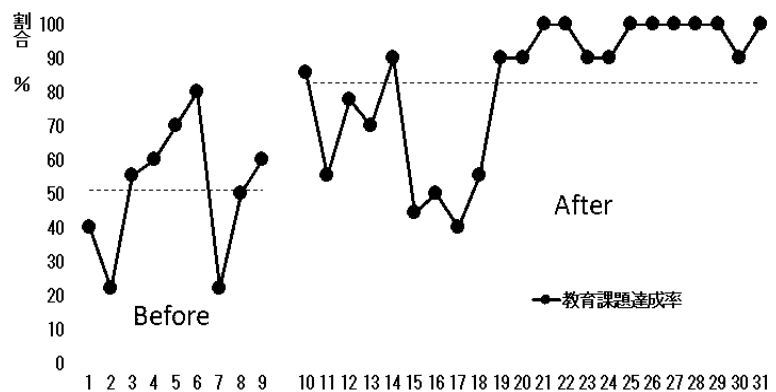


図2 教育課題の達成率の変化 日数

教育課題の達成について記録を取り、90%以上の活動で達成された日が10日以上続くことを目指し支援を開始した。支援開始後10日目から10日連続で90%以上を達成した。（図2）

3 考察

当初、望ましい行動を引き出す手立ては写真が中心だったが、次第に「すぐ」「大げさに」ほめることが徹底され、メインはそちらにシフトしていった。切り替えが難しいときに予定表を一緒に見て活動の確認をしたり、「〇〇やりたかったんだね」と共感した上で「今はできないから△△にやろうか」と代替案を出したりすることで次の活動に移れることも増えた。やる気を引き出すことやほめることの精度を高め、幅を広げる作戦会議を定期的に行えればさらによかった。

※ABC分析

行動が起こったり、繰り返されたりする原因をその前後にあった事柄に焦点を当てて考える分析方法で、行動上の問題の改善に役立てるため、特別支援教育や障がい者福祉の分野などでよく使われる。「応用行動分析」という心理学の分野の主要な分析方法。

分析したい行動の前にあった出来事や環境などを「**先行条件**」、直後にあったことを「**結果**」とし、その間に「(分析したい) 行動」を入れて、3つの枠をつなげて考える（図1参照）。

分析したい行動がどんな環境（時、場面、学習内容、人との関わりなど）で起こり、その結果本人にとってどんな利益が生じているのかについて、観察を重ね、仮説を立てていく。特に重要なのは結果で、行動の直後に生じた利益が大きければ大きいほど、その行動の頻度を高めると考える。行動の頻度を高める結果をその行動の「**強化子**」といい、「**強化子**」を用いて行動の頻度を高めることを「**強化する**」という。また、結果に含まれる行動の真の目的をその行動の「**機能**」という。

事例では、A生の不適切にみえる行動の主な**機能**を「注目や関わりの獲得」と推定した。つまり、A生のこれらの行動の後に、その行動をやめたり、次の学習を促したりするために様々な方法で先生が関わっていたことがA生にとって実は大変うれしいことであり、逆にそれを得

るためにこのような行動を繰り返していたのではないかと推定した。そしてこの仮説に基づき、対策（具体的な支援内容参照）を立て実行すると、こういった行動が減少し望ましい行動が増加した。

6 言葉の力をつけることで、少しずつ自信を持って自分の伝えたいことが伝えられるようになってきたB児の事例

小学校 LD等通級指導教室

1 児童の実態（「個別の指導計画」より）

(1) 学年 性別 2年生 女子

(2) 日常生活の姿

- ・おしゃべり好きだが、何を伝えたいのか分からないことがある。
- ・担任の一斉指示では理解できず、個別に指示をしても理解できないこともある。友だちがやっているのを見て、どうやればよいか理解している様子。

(3) 「可能性の芽」「本人・保護者・教師の願い」から設定した教育課題

- 言葉の力（口頭指示の理解、語彙力等）をつけることで、自分の伝えたいことを相手に分かりやすく伝えられる。

2 実践事例

(1) 児童の姿

入学当初から学習理解が難しく作業も遅いため、知障学級対象かもと感じて諸検査を実施したが平均の範囲であり、実態と差があると感じた。言語理解指標が本人の中で最も得意との結果であったが、それは言葉数が多いので点数に加算されたためと解釈した。その後、言語・コミュニケーション発達スケール（LCSA）も実施したところ、口頭指示の理解や音韻意識、語彙知識が苦手と分かったため、その部分を補うために週1時間の通級指導を行うことにした。

(2) 個別の指導計画を生かした支援（できる状況づくり・手立て）と児童の学びや育ち

○通級教室の授業の様子

- ・しりとりで、1分間に何回言葉をつなげられるか個数を数えていった。1分間で約20個の言葉をつなげられるようになった。
- ・フリートークでは、本児が話したいことを自由に話し、それに対して質問したり、情報を整理したりした。ときどき語の置換（例：「やわらかい」→「やらわかい」）や言い間違いがあったので、その訂正も行った。
- ・スリーヒントクイズでは、答えが頭に浮かんでいるがその言葉が出てこない姿が見られたため、クイズを出す前に視覚的な情報（答えが描いてあるイラスト）を見せることで、答えが出てきやすいようにした。

○学級での支援の様子

- ・国語と算数では、黒板に近い席で、すぐに担任の支援が入れる位置で行っている。
- ・+αの宿題として、漢字の宿題を出している。本児も嫌がることなく真面目に取り組み、家庭でも母が様子を見てくださっている。

3 考察

- ・視覚的な情報を使って的確に状況を読み取れることから、視覚的な情報を活用することで理解につなげていけることが分かった。本児にも「あなたは、目で見える物を使って考えると分かりやすいよ」と伝えた。
- ・聴覚的な情報を取り入れることの苦手さへの支援はどのようにするかが課題。苦手な部分を鍛えるより、得意な部分を使って補っていく方法がよいのではないかと考えている。
- ・学級では、朝の会のフリートークのときに長く話すことができたり、漢字テストでよい点をとれたり、周りの友だちからも称賛される姿が多くなり、以前より自信がついてきていると感じる。

V 本年度の研究の結果から次年度更に研究すべき課題は何か

1 個別の指導計画の活用と主体的に学び続ける児童生徒の支援について

特別な支援が必要な児童生徒は個々の課題がそれぞれ異なる。特別支援学級の担任が個別の指導計画を立てるとき、一人ひとりの児童生徒がどんなことに興味を持ち、どんな願いを持ち、どんな事が得意なのか、どんなことが苦手なのか等、その個の実態を深く分析していく。そして、その個の実態から可能性の芽を考え出し、保護者の願いや担任の願いとも照らし合わせ、個の教育課題を考え出していく。この教育課題は支援を考えていくための基盤となり、個の育ちに応じて見返され、作りかえられていくものである。

〈事例〉

- 1 学習においてできる状況づくりを重ねたことで自己肯定感を感じられるようになってきたC児
- 2 生活の流れや活動に見通しを持つことで原学級に参加できる姿が増えてきたD児
- 3 自己理解・他者理解の学習を通して登校できるようになってきたE児
- 4 興味があることや得意なことを取り入れた活動を用意することで主体的・意欲的に活動に取り組む姿が見られるようになったF生
- 5 やる気を引き出し望ましい行動をほめることで気持ちの切り替えが上手になったA生
- 6 言葉の力をつけることで、少しずつ自信を持って自分の伝えたいことが伝えられるようになってきたB児

今回、上記6つの事例では、教師の「できる状況作り」や支援により、児童生徒たちが自らの願いに基づいた課題に対して少しずつ「できた」「がんばった」を積み重ね、様々な育ちの姿が見られた。

このように、児童生徒が気持ちを安定させ、児童生徒たちにとって主体的な学びに繋がる支援となったのは、具体的な支援を考える教師の中で、個の教育課題がその根底にしっかり根付いていたからに他ならない。

2 次年度以降に研究していきたい課題

今年度は、委員一人ひとりが実践事例を持ち寄り、教師の支援と児童生徒たちの具体的な姿から、主体的に学び続けることができる状況づくりについて考えてきた。

次年度以降は、今年度の成果を踏まえ、児童生徒が自らの伸びを実感できるような授業づくりについて、さらに研究を進めていきたい。